

第4章 社会言語学視点による第二言語習得

はじめに

SLA 研究の目的の1つは「学習者が学習すべき L2 に関する知識はなにか」、そして「その知識をどのように習得し実際に使っているのか」という事を明らかにする事であり、L2 の習得と運用は実際の社会的コンテキストの中で行われるため、それと言語運用の間にどのような関係があるのか理解することが求められる。本章では McKay&Hornberger(1996)が規定した①言語と社会、②言語の変異、③言語と相互行為、④言語と相互行為の4つの研究領域のうち、特に②と③に焦点を当て、SLA 研究の方法論を見ていく。

1. 社会的コンテキストと SLA 研究方法

Goodwin&Duranti(1992)は、コンテキストという概念について「①焦点となる事象、②事象が生じる行動の領域の事」であると規定している。さらに、Young(1999)は、コンテキストの研究に関する8つの伝統的な流れを示しており、その中でも2つの対照的な視点が社会言語学的な SLA 研究の流れを確立したと述べている。その対照的な視点は以下の通りである。

<第一の視点> … 言語の変異研究や相互行為研究で適用されている

コンテキストとは、言語使用の場面や会話参加者の文化的背景、L1/L2 の能力、ジェンダー、社会的地位などのようにあらかじめ与えられたものとして捉える。



<第二の視点> … 民族社会学的方法論者や会話分析によって支持されている

コンテキストとは、実際の言語使用によって会話参加者が相互

行為の中で作り上げていく動的なものとして捉える。

(1) 量的研究方法：計量的アプローチ

第一の視点による研究方法は、中間言語の変異研究の流れと話し手、コンテキストは独立変項であるとし、コンテキストの特徴とある特定の言語フォームの変異を関連付けようとするものである。

(例：Baylay の中国語母語話者が発話する英語の研究など)

また、これらの研究は、Young&Baylay(1996)によれば、中間言語の変異は計量的手法によりモデル化することができるという。(数量化モデル) 数量化モデルによって示された数値はコンテキストの特徴と言語変項の関連性の強さを示す指標になっている。

(2) 質的研究方法：解釈アプローチ

第二の視点による研究方法は、コンテキストは動的なものであると捉え、計量的分析はせずに、自然発話におけることばのやりとりを、ありのまま詳しく記述しようとするものである。話し言葉については、異文化コミュニケーションの談話分析と民族社会学的方法論による会話分析がある。

異文化コミュニケーションの談話分析は、SLA 研究における重要な部分を占めており、L2 学習者の個々に見られる言語能力の欠如とコミュニケーション上の困難点を明らかにした研究が多い。

民族社会学的方法論による会話分析は、相互行為におけることば遣いを解明するのに計量的手法を用いる事を最も懐疑的としており、原理においては、会話は参加者の視点から記述的に分析されるべきだとしている。あいづちや重複、ポーズ、話題の選択などに着目してネイティブと L2 学習者の比較がなされてきている。

(3) 量的・質的方法

2つの視点による研究方法を同時に取り入れた研究もおこなわれている。ある会話現象を、分析対象となる言語的特徴の出現頻度と、質的分析の両方のアプローチから解明しようとするものである。

2. 中間言語の変異研究

(1) 変異研究の理論的背景

1) ラボフ学派パラダイムによる変異研究

社会言語学において、Labov(1972)は、「言語の話し手の社会的特徴と一致して体系的に変わる」という概念を構築した。加えて、SLA 研究への応用として、中間言語分析による発達変異を結びつける研究を可能にした。学習者の発話に見られる可変性についての Dickerson(1974)の音韻レベルにおける研究が、SLA 研究への応用としての最初の発表であり、これ以降から 80 年代まで多くの研究発表がなされ、L2 学習者の中間言語に見られる一見バラバラな言語行動が、実は L2 学習に関わる様々な社会的コンテキストと体系的に関連性があるということが示された。

2) 可変性と中間言語をめぐる議論

しかし 80 年代後半になると、L2 習得の変異研究者と普遍文法支持者の間で、L2 学習者の中間言語にみられる可変性と社会的コンテキストとの関連性が理論的な研究対象になるのかどうかをめぐって、対立が生じた。(Elis,1990; Gregg,1990; Tarone,1990) しかし、どの主張もデータを用いての議論ではなかったため、Eckman(1994)は、それぞれが実証的なデータを提示しなくてはならないと指摘した(1994:14)。この指摘以降、実証的研究が多くなり、個々の L2 学習者の中間言語に見られる体系的な可変性こそが中間言語の発達に重要であるとの見解が支持されてきている。

また、社会的コンテキストが習得の発達段階に与える影響については Baylay(1996)と Regan(1996)の研究がある。

(2) 対話の視点における変異研究

Tarone&Liu(1995)と Shea(1994)の研究で、中間言語の発達に

おける変異と機能について、相互行為における対話の視点からとらえる興味深い研究がなされている。(p68)

3. 談話分析とコミュニケーションの民族誌

(1) 異文化コミュニケーションの談話分析

近年では、異文化である相手のコミュニケーションスタイルを否定的に評価することは、異文化に対する偏見を強化しかねる恐れがあるため、異文化コミュニケーションに生じる困難点はネイティブと非ネイティブ両者の視点から解明しようとする両方向性の解釈が重視されるようになってきている。(Bailey,1997)

(2) 民族社会学的的方法論による会話分析

→White(1997)、Young&Halleck(1998)、Kim&Suh(1998)、Ross(1998)らの研究

いずれも熟達度が高い方(及びネイティブ)が会話をコントロールするという結果になり、総じて異文化コミュニケーションが L2 学習者によって社会的に不利な結果を生じてしまうということを示唆している。

練習問題

(1)

①コンテキストを、言語使用の場面や会話参加者の文化的背景、L1/L2 の能力、ジェンダー、社会的地位などのようにあらかじめ与えられたものとして捉える視点。

②コンテキストを、実際の言語使用によって会話参加者が相互行為の中で作り上げていく動的なものとして捉える視点。

調べたこと・考察など

数量化モデル

→1～6類までである。程度や状態、有無、可否、Yes/Noなどの数値データではないデータに強制的に数字を割り当て、因子分析や相関分析などの多変量解析を行うことである。

この章の内容は非常に興味深くて面白かった。Ciniiで

「interaction」「interlanguage」等と入力してみたがなかなか論文が見当たらなかったことから、まだあまり進んでいない分野なのではないかと感じた。特に日本人英語学習者に関しては特にそう感じた。中間言語語用論という理論言語学（語用論）の中の領域の論文はちらほらあったが、応用言語学コースで取り扱っているエスノメソトロジー的手法(会話分析：CA)で中間言語を分析した物は、私が調べたときはあまり見当たらなかった。

中間言語を、CAの視点から長期的目線で観察してみたい。CAは、録音だけにとどまらず動画も録音し、発話以外の行動（いわゆる身振り手振り）も秒単位で観察し、当事者間でどういう行為が達成されていくかを記述していく手法である。この手法とSLA研究でよく行われる手法を用いて、ある日本人英語学習者がどういうステップを踏んで目標言語に近づいていくのか記述していけば、また一味違った意見が述べられるのではないかなと感じた。